

〈論文〉

母源へのいざない

——太宰 治論——

原子 修

1 母源喪失のいたみ——母たねからの隔離と、代母としての乳母と叔母きゑ——

太宰治の一生は、ひとりぼっちの蜂起だった。

しかし、だれへの、なにゆえの……

一九〇九年六月十九日、青者県北津軽郡金木村大字金木字朝日山四一四番地の津島家に生まれおちた瞬間、無抵抗な彼の全身にふりそそいだのは、致命的な挫折の予兆だった。

なぜ、彼の父源右衛門は、「津惣」(のちへ源^{ヤマゲン})の屋号を冠する青森県有数の大地主、銀行家、政治家でなければならなかったのか。

どうして、母たねは、太宰治、つまり戸籍名の津島修治を第十子・六男としてうみおとしてすぐ、病弱のため彼を乳母につけなければならなかったのか。

あるいは、それは、シェイクスピアのいうとおりのものなのだろうか。

「おお運命よ。運命よ、みなが汝を浮気者と言う。」（「ロミオとジュリエット」より）

とはいえ、フランスの作家モーリアックの洞察は、けっして、津島修治を例外対象とはしなかった。

「子どもというものは、生まれながらにしてすでにさまざまな性格や気質を負っている、おそるべき老人なのである」
修治の人格基層に深く刻印されていたはずの、超次元的な自由への熱願は、しかし、はやくも、手ひどい攻撃にさらされねばならなかった。

母たねを篡奪され、乳母へと預托されることによって生ずる、いわれのない母源喪失感。

それが、非力な乳呑児としての修治の心的なホメオ・スタシス……いわば、一種の、恒常的に安定した多幸福感の保全機構を、根底からゆるがし、絶えざる不安感の激流につき落とすとしたとしても、その責めを負うものは、どこにもいはいない。

実母たねではなく、乳母の乳で育った修治の、この世での最初の一年たらずの時間から、彼がすすりつつたのは、どんな異系の味だったのだろうか。

しかもなお、やっと、その乳母への馴順が確定しはじめると、乳母は再婚のため、修治の世界から消滅する。

僕は母から生まれ落ちると直ぐ乳母につけられたのだそう。けれども僕はをしいかな其の乳母を物心地がついてからは一度も見つた時もないし使ひもない。

これは、大正十二年二月四日、金木小学校を卒業して組合立明治高等小学校一年生であつた十三歳の修治の作文の冒頭の部分だが、第二の母源喪失体験が、一歳足らずの幼児の深層心理に負わせた損傷は、けつして軽いものではなかつた。

胎児としての修治が、十カ月になんなんとする羊水空間で全身的に馴親していたはずの生母たねから切断された、という第一の母源喪失体験に、さらに加重された、この乳母との切断は、修治の潜在意識に、「置き去りにされた」者の「りのこされた」感覚を、ほぼ、決定的な孤独感として植えつけた。

鋭敏で繊細な魂は、すでに、「余りもの」としての、極度にヘテロな自我像の制作にとりかかろうとしている。それに追い討ちをかけたのが、乳母去つた後の修治の代理母となる叔母きゑへの逢着と、そして離別であつた。

きゑは、修治の母たねの妹(修治の祖父津島惣五郎の次女)で、二度目の夫と死別したのち、四人の女の子と一緒に、実家に身を寄せていたから、裏階段の横にあるきゑの部屋で、きゑの介添によつて誕生した修治が、七歳まで、きゑの四人の子といっしょに、きゑの部屋で実子同然に育てられた故をもつて、きゑを実母と思ひこんでいたとしても、それを非難するにはあたらない。

本能のアンテナですばやくキャッチした母源喪失のいたみは、母にかわるなものかの手でいつくしみ深く慰藉されなければならぬ。

それを引き受けたきゑは、松木友三郎(修治の父源右衛門の実弟で、松木家の五男)を婿養子に迎えて十七歳で結婚し、別居後、りえとふみの二児をもうけたが、夫の酒乱と浮気のため離縁し、その後再婚してキヌとテイの父となつた

青森の豊田常吉も病いで他界し、二十七歳の未亡人として、実家に戻った、という、宿運の女性であった。

母源喪失の苦悩を負うものを慰撫できるものは、母源のありかを熟知するものでなければならぬ。

とりわけ、修治が三歳のとき、衆議院議員に当選した父源右衛門が、東京に別邸をもつて、母たねと共に東京暮らしが多くなり、きゑは、修治の母源喪失の空隙をうめる存在として、不可欠の代理母となっていた。

叔母はよく夏の夜など蚊帳の中で添へ寝しながら昔話を知らせたものだ。僕はおとなしく叔母の出ない乳首をくはいながら聞いて居た。

(作文「僕の幼時」より)

修

子 おそらくは、きゑの、乳のでない乳房こそは、修治にとつての、母源喪失のシンボルであり、永遠にありつくことのできない彼自身への母乳をさがしあてようとする修治の不毛の旅は、すでにはじまっていたのである。

原 きゑの乳房をかりて、母源回帰を果たそうとする修治の、けっしてむくいられない宿願は、しだいに、修治の内部に、破局のエロスを焙りだしていった。

またある夜、叔母が私を捨てて家を出て行く夢を見た。叔母の胸は玄関のくぐり戸いっぱいにふさがつてゐた。その赤くふくれた大きい胸から、つぶつぶの汗がしたたつてゐた。叔母は、お前がいやになつた、とあらあらしく呟くのである。私は叔母のその乳房に頬をよせて、さうしないでけんせ、と願いつつしきりに涙を流した。叔母が私を揺り起した時は、私は床の中で叔母の胸に顔を押しつけて泣いてゐた。眼が覚めてからも私は、まだまだ悲し

くて永いことすすり泣いた。けれども、その夢のことは叔母にも誰にも話さなかった。

(小説「思ひ出」より)

きゑへの帰順本能がつのるほど、潜在意識は、きゑの消失を畏怖して、ふるえおののく。

そのとき、修治の深層から渦巻きあがってきた母源願望の霧が、いつしか、豊饒の乳房もあらわな、野性の地母神^{ポモナ}へと形をとりはじめていた事実をみのがすことはできまい。

ポモナ……それは、わたしたちの意識の曙から光の花束をひろいあげてくるオーストリアのウイレンドルフ出土の石灰石裸婦像の豊満であり、いまにもこぼれ落ちそうな命の乳房をからくも腕^{カイト}の地平線に支えもつシリア出土の坐婦裸像の熟成であり、閉じることによつて大きくみひらかれた目に宇宙の刈入れ時をまざまざとうつしだす津軽出土の縄文晩期の庶光器土偶の母性我である。

修治は、きゑの乳房に、彼じしんの根源に全裸で立ちはだかる、永遠のポモナの予兆をみた。

母源喪失が手ひどいほど、そして、それに対する修治の過剰反応が質量共に全人格的なスケールへと波及するほど、彼のポモナ志向は、加速され、強化される。

そして、その結果は、仕極当然の成り行きとしての、彼の母源喪失の直接の原因者たる母たねへの、修治の、いわれもない忌避行動である。

母様の前で読んでも何も呉れない。たゞ僕の頭をなで、一番とれよと言って呉れる。

(作文「僕の幼時」より)

本を読めるようになって得意満面の修治に対して、いかにも冷淡な、競走原理むきだしの騎馬民族タイプの反応しか示さない実母に対し、代理母としてのきゑの示す、つぎのような対応は、敏感で傷つきやすい修治の自我萌芽期に対して、あまりにも許容性に富んだものであった。

うれしくてたまらないから叔母様に読んで見せると必ず昔話一つ知らせて呉れるし、僕は昔話は大そう好きであつた。どんなに泣いて居る時でもどんなに怒って居た時でも、昔話を知らせて呉れ、はすぐにこにこするのであつた。だから僕は叔母に一番多く読んで見せたものだ。

修

(以上二文共作文「僕の幼時」より)

原 子

きゑが代理母としての欠損部分を補填するのに用いた、「舌切雀」や「金太郎」などの話は、そのまま、歴史的に集団仮構された生活者の価値のシステムであり、想像力によって典型化された世界の実像の一面であり、それは、そのまま、修治の母源喪失空間を穴埋めしてくれる、虚構の質量だった。

母に対しても私は親しめなかつた。乳母の乳で育って叔母の懐で大きくなった私は、小学校の二三年のときまで母を知らなかつたのである。

(小説「思ひ出」より)

修治の、母源喪失の増幅装置に、さらに新たなボルテージを付加したのが、五、六歳までの修治の、ほとんど、父母

や兄弟から切断される形で、きゑ一家の居室たる裏階段脇の十畳間に隔絶の時を送らされた、という事実であった。いわば、一種の、家庭内疎外地に隔離されたものの流刑者の状況は、修治を、居ながらにしての「余所者」^{ヨソモ}たる自己の確認へと追いやるのにじゅう分だった。

叔母については追憶はいろいろとあるが、その頃の父母の思い出は生憎と一つも持ち合せない。曾祖母、祖母、父、母、兄三人、姉四人、弟一人、それに叔母と叔母の娘四人の大家族だった筈であるが、叔母を除いて他のひとたちの事は私も五六歳になるまでは殆ど知らずにゐたと言つてよい。

(小説「思ひ出」より)

すでに、幼年にして、修治は、マジョリティたる弥生人系・騎馬人系によつて大自然という母源を剝奪され、マイノリティたる「化外の民」の座に流刑された、この列島のここ一三〇〇年来の原住民たる縄文人系の人々の、被差別者としての悲運と同質のものを、全きプライベートな生存状況の中で、はしなくも背負ってしまったのであった。

この事態は、けつして軽視されていいものではない。

私は、叔母に可愛がられて育ちました。私は、男ぶりが悪いので、何かと人にかかわれて、ひとりでひがんでいましたが、叔母だけは、私を、いい男だと言つてくれました。他の人が、私の器量の悪口を言つと、叔母は、本気に怒りました。

(小説「津軽」より)

容貌は、修治にとつての、自己確認のシンボルだった。生れながらにして負の価値系にくみこまれて了ったものが、己の深層をのぞきみてほくそむための、生ける鏡だった。

そして、確実に、彼は、その鏡に投影されてくる、肉親たちの差別意識を、視認することができた。

私が兄弟たちとお膳のまへに坐つてゐるときなど、祖母や母がよく私の顔のわるい事を眞面目に言ったものだが、私にはやはりくやしかった。

(小説「思ひ出」より)

修

原 子

私は容貌のことだけでなく、不器用だといふ点で祖母たちの気にいらなかった。箸の持ちかたが下手で食事の度に祖母から注意されたし、私のおじぎは尻があがつて見苦しいとも言はれた。私は祖母の前にきちんと座らされ、何回も何回もおじぎをさせられたけれど、いくらやって見ても、祖母は上手だと言って呉れないのである。

(小説「思ひ出」より)

偶然とはいえ、この状況は、騎馬人系の大和権力が、皇化の及ばない「化外の地」たる東北の「蝦夷」に対して示した、度重なる恭順の要求と一致する。

そして、千数百年前までは、かくれもなき「蝦夷」の牙域であったはずの津軽、いや、さらにさかのぼれば、一万年になんなんとする縄文文化時代の頂点を極めたはずの亀ヶ岡文化を擁する津軽にありながらも、ついには弥生化、騎馬人化の波に屈して、稲作を受け入れ、武装権力たる津軽藩の管理システムに組み敷かれて、いちじるしく騎馬人タイプ

化した津軽人の末裔たる津島家が、当然のごとくにして修治に要求した、騎馬人系神話への恭順と一致する。

もともと、津島家は、修治の曾祖父惣助が、金貸業などを種に急成長させた大地主・大商人の家柄で、農民や平民からの収奪や利潤回収によって巨富を築きあげるといふ、文字通り、騎馬人タイプの典型であった。

弥生人タイプの農民や、縄文人タイプの貧民の血と汗と涙を吸いとって、騎馬人タイプの津島家が栄華を誇る、という状況は、そっくりそのまま、当時の日本国家の騎馬人系・弥生人系・縄文化系の三層構造と重なり合う。

多額納税の功によって貴族院議員有資格者となった津島家から、修治の父源右衛門が県会議員となり、さらに明治四十五年には政友会から出馬して衆議院議員となり、東京で、国家の権力中枢に参入したという事実も、自然状態を尊崇する縄文人タイプや、稲作農耕に神威を感じとる弥生人タイプから完全に離脱した津島家の、騎馬人タイプへの華麗な転身を鮮やかにものがたっている。

それ故の、ついに終生騎馬人タイプに己を馴従させることのできなかつた修治の、幼時からの「化外」ぶりであり、「余所者」じみた振舞いであり、「余りもの」めいた心根のねじれであり、騎馬人タイプへの帰化を信条とする祖母・父母・兄達との違和であり、それ故の、「容貌」や「不器用」を手がかりとする、修治への津島ファミリーの疎外行動であり、そのゆきつく先は、修治の、読書や作文、ついには創作活動による現実逃避と、その方向でますます鮮明になる母源の光への、あまりにも空しすぎる回帰の試みであった。

そして、修治をあたかも縄文人タイプの「俘囚」の坐に据えるがごとき津島家の騎馬人タイプの牙域として、明治四〇年六月、落成した津島家の新居（現在の斜陽館）は、高さ四メートルの煉瓦塀で小作争議の攻撃に備えた、いわば一種の騎馬人タイプの権力者の城砦の性格をも併せもっていた。

それは、斜め前に金木警察署を配し、さらに周囲に役場、郵便局、銀行、病院などを集中させることによって、文字

通り、政・経・警の中枢機能の中心に位置することによって、完全なものとなった。

高い望楼をもつ金木警察署は、文字通り、騎馬人タイプの権力機構たる津島家を縄文人タイプの賊や弥生人タイプの小作争議から防衛する身辺警護装置なのであった。

約六〇〇坪の宅地に、一階一室一五四坪・二階八室一〇〇坪の宏壮さを誇って津島邸はそびえたつたが、その家での最初の新生児が修治であった、という事実の、なんとという歴史のアイロニーであろうか。

金木村の中心部のほとんどの土地を専有する津島家にうまれた修治を、異端へとかりたてる運命の仕組みは、二重・三重にできあがっていたのだ。

修　そして、母源喪失、そして、家庭内流刑。

最初の乳母による授乳、叔母するによる養育の過程で、自然現象そのもののように、己を、父権中心の騎馬人タイプにペトン化された津島ファミリーから異化していく修治は、それによって、逆に、母権中心の縄文人タイプのやさしさ、やわらかさ、豊かさにめざめていったが、その鋭い反逆の刃は、当然のことながら、可能な限り隠蔽されるべき性質のものだった。

私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

一葉は、その男の、幼年時代、とでも言ふべきであろうか。十歳前後かと推定される頃の写真であって、その子供が大勢の女のひとに取りかこまれ、(それは、その子供の姉たち、妹たち、それから、従姉妹たちかと想像される)庭園の池のほとりに、荒い縞の袴をはいて立ち、首を三十度ほど左に傾け、醜く笑っている写真である。醜く? けれども、鈍い人たち(つまり、美醜などに関心を持たぬ人たちは、面白くも何とも無いやうな顔をして、

「可愛い坊ちゃんですね。」

といい加減なお世辞を言つても、まんざら空お世辞に聞えないくらゐの、謂はば通俗の「可愛らしさ」みたいな影もその子供の笑顔に無いわけではないのだが、しかし、いささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見てすぐ、

「なんて、いやな子供だ。」

と頗る不快さうに呟き、毛虫でも拂いのける時のやうな手つきで、その写真をはふり投げるかも知れない。

まったく、その子供の笑顔は、よく見れば見るほど、何とも知れず、イヤな薄気味悪いものが感ぜられてくる。どだい、それは、笑顔ではない。この子は、少しも笑つてはゐないのだ。その証擗には、この子は、両こぶしを固く握つて立つてゐる。人間は、こぶしを固く握りながら笑へるものではないのである。猿だ。猿の笑顔だ。ただ、顔に醜い皺を寄せてゐるだけなのである。「皺くちや坊ちゃん」とでも言ひたくなるくらゐの、まことに奇妙な、さうして、どこかけがらはしく、へんにひとをムカムカさせる表情の写真であつた。私はこれまで、こんな不思議な表情の子供を見た事が、いちども無かつた。

(小説「人間失格」より)

あきらかに、金木の実家の庭でとつた小学校時代の修治の家族写真をモデルにしていると思われるこの文章は、死の年の昭和二十三年三月に書かれたが、「荒い縞の袴」「首を三十度ほど左に傾け」「醜く笑っている」など、姉あい、従姉テイ、姉トシ、姉きやう、従弟逸朗、弟礼治と共にうつした写真の中の自像への自嘲にみちみちている。

「笑い」は、修治にとって、自我の深層にひそむ「背離」「離反」「あらがい」そして「蜂起の衝動」へのカモフラージュ

であり、相手の目を己の本心からそらすための擬似行動だった。

金木第一尋常小学校時代の級友との写真の中でどこか苦みのはしった笑い顔や、青森中学校時代の兄弟や級友との写真の中で修治ひとりだけの秘めやかな含み笑いめいた表情は、己の深層でますます肥大化していく母源回帰の衝動をひたかくそうとする、彼の、一種の仮面のまといにほかならない。

そして、仮面のまといが、そのまま、全身を仮面化することによって成立する道化演技へとつながっていくのを避けられるものはどこにもいはいはしない。

修 自分の幸福の観念と、世のすべての人たちの幸福の観念とが、まるで食ひちがつてゐるやうな不安、自分はその

不安のために夜々、輾転し、呻吟し、発狂しかけた事さへあります。自分は小さい時から、実にしばしば、仕合せ者だと人には言はれて来ましたが、自分ではいつも地獄の思ひで、かへって、自分を仕合せ者だと言ったひとたちのほうが、比較にも何にもならぬくらゐずっとずっと安楽なやうに自分には見えるのです。

(小説「人間失格」より)

いや、しかし、ことに依ると、……いや、それもわからない、……考へれば考へるほど、自分には、わからなくなり、自分ひとり全く変つてゐるやうな、不安と恐怖に襲はれるばかりなのです。自分は隣人と、ほとんど会話が出来ません。何を、どう言つたらいいのか、わからないのです。

そこで考え出したのは、道化でした。

それは、自分の、人間に対する最後の求愛でした。自分は、人間を極度に恐れてゐながら、それでゐて、人間を、

どうしても思ひ切れなかつたらしいのです。さうした自分は、この道化の一線でわづかに人間につながる事が出来たのでした。おもてでは、絶えず笑顔をつくりながらも、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合ひとでもいふべき危機一発の、油汗流してのサーヴィスでした。

自分は子供の頃から、自分の家族の者たちに対してさへ、彼等がどんなに苦しく、またどんな事を考えて生きてゐるのか、まるでちつとも見当つかず、ただおそろしく、その気まづさに堪へる事が出来ず、既に道化の上手になつてゐました。つまり、自分は、いつのまにやら、一言も本当の事を言はない子になつてゐたのです。

その頃の、家族たちと一緒にうつした写真などを見ると、他の者たちは皆まじめな顔をしてゐるのに、自分ひとり、必ず奇妙に顔をゆがめて笑つてゐるのです。これもまた、自分の幼く悲しい道化の一種でした。

(小説「人間失格」より)

すでに、「道化」は、単に、母源回帰への願望をカモフラージュするための偽装の枠組みを越えて、母源喪失をきつかけに誘発された個の隔離行動を、絶対孤独の極限へと追いつめはじめた。

あまりにも、繊細で、傷つきやすく、鋭敏すぎる魂が、生のはじまりと共に背負つた母源喪失のいたみから逃れるために仮構した「道化」の罫……しかし、その罫に己を突き落とした瞬間、すでに、後戻りのできない失墜が、彼をめしとつてしまう。

だが、それを避けられよう。

この、あまりに悲惨な自己処刑の全量を目にさらすことによつて、おのれの宿運を天上の星へと光明化する神話は、すでに、同じ東北の天才宮澤賢治の「銀河鉄道の夜」中の「蠍の火」のくだりにおいて、ものの見事に形象化されてい

たものであったとはいえ、それを、おのれの生の全容によってあますところなく現実化した修治は、あるいは、血まみれの神話を生きぬいた、稀有の自己犠牲者の一人であったのだろうか。

そして、天高く燃えさかる想像力の火によって、個として絶対孤独を死守しようとした修治の生涯は、そのまま、母源世界の奪還をもくろむ、ひとりぼっちの蜂起とならざるを得なかったのであった。

2 津軽・母源世界の差し招き——育ての乳母^{アマダ}たけの出現——

修 母たねからの、状況としての、また、メンタルな面での、深刻な切断体験がもたらした母源喪失のいたみは、最初の乳母の授乳と、それを引き継いだ叔母きるとの共生、さらには、彼女らとの切断・疎遠によって、二重・三重に増幅されたが、同時に、乳母ときるともたらした慰藉も、けっしてちいさいものではなかった。

原 そして、その意味では、きるとの共生期に、育ての乳母^{アマダ}として出現したたけとの遭遇と切断は、修治の全生涯を決定づける最重要の事件であった。

六つ七つになると思ひ出もはっきりしてゐる。私がたけといふ女中から本を読むことを教へられ、二人で様々の本を読み合つた。たけは私の教育に夢中であつた。

(小説「思ひ出」より)

たけが、修治に与えた致命的な影響については、後年の、彼じしんの文章から、明確に推量できる。

このたび私が津軽へ来て、ぜひとも、逢ってみたいひとがいた。私はその人を、自分の母だと思っているのだ。三十年ちかくも逢わないでいるのだが、私は、そのひとの顔を忘れない。私の一生は、その人に依って確定されたといっているかも知れない。

(小説「津軽」より)

小説「津軽」は、小山書店からの依頼で、昭和十九年の五月から六月にかけての津軽旅行をもとに、七月に書き終えられた作品だが、三十五歳の修治が、おのれの幼年体験の中心にたけを据えていた、という、まぎれもない事実が、鮮やかに読みとれる。

いわば、この津軽への旅は、修治の母源回帰への旅であり、母源としてのたけに象徴される母系制集落への旅であり、母系制の中心に位置していたはずのイタコを頂点とする巫女世界への旅であり、巫女群を信じられないほどの長年月にわたって蓄養してきた津軽世界への旅であり、津軽世界をきわだつて支えつづけてきた縄文系世界への旅であった。

では、修治の、たけによつて「確定された」もの、と思われるものは、何か。

すでに、十三歳の修治の書いた作文「僕の幼時」は、たけの存在のただならぬ位置を、つぎのようにしるした。

若しこのことが少しでも叔母の知る所となれば叔母はだまつては居ない。きびしくしかつて其の上土蔵に入れられたことも往々ある。そんな時には必ず小間使のたけが僕のかはりにあやまつて呉れる。たけは家の小間使でもあり、僕の家庭教師でもあるし、僕の家来でもあるのだ。五六才の時から僕は毎晩毎晩たけの所に行つて本を教はつたものだ。始めはハタタコと一字々々に覚えて行くのは僕にとつては又たまらなく面白かつたのである。そして一、

二ヶ月の間にどうやら巻一は読める様になった。学校に入りによくなった頃にはもう巻三にも手をのびし様になった。

この作文は、「こうゆう風にして僕はずん／＼成長して来たのだ。今でも叔母様やたけの事を思ふと恋ひしくてならぬ」で終わっていて、失われた母源奪還の対象として、叔母きゑとたけの二人をあげているが、前述の作文に表現されたきゑとたけの位相のずれは、注目に値する。

きびしく叱責し、処罰するきゑの厳しい愛情は、それがどんなに慈愛にうるおされたものではあつても、大富豪津島家の次女として生をうけたものの、騎馬人タイプの規律にうらうちされたものであるのは、否めない。

いわば、きゑの愛情は、フロイトのいう、現実原理にもとづく、騎馬人タイプ化された津島家への馴順を誘導する性質のものであつた。

原 いかえれば、きゑの養育は、あくまでも、騎馬人タイプ特有の、厳格な散文的抗争体の倫理を背景とする、現実適応の方向をとっていた。

しかし、たけは、ちがった。

くしくも、前掲の作文があらわにした、「罰するもの」と「赫免するもの」の対極の構図が暗示する、きゑとたけの差違は、けつして小さいものではない。

たけの愛情は、全く偶然にも、修治が、母たねと最初の乳母からの切断によって手ひどく深層体験した母源喪失のいたみときわめて類似した水脈から湧きでてくるものであつた。

たけは、明治三十一年七月十四日、修治と同じ金木村の朝日山三七六番地に、近村永太郎を父とし、と代を母とし、

四女として出生した。

修治が幼いころ、たけは、きゑ付きの女中として津島家に住み込み、きゑのはからいで修治の子守役となったが、そのいきさつを、田口昭典氏は、つぎのように書いている。

凶作によつて農民は土地を売り、土地がなくなればその娘を売らねばならなかった。太宰の生家津島家は、そのような津軽地方に君臨した、新興の地主、資本家であつた。子守のたけの実家も、元は五反歩の自作農であつたが、借金の返済ができぬまま津島家の小作農に転落して、年貢米の一部としてタケの姉トセが女中として雇われていたが、農作業が忙しくなつたため、妹のタケと交替し、タケが子守になつたといういきさつからも、ひと握りの大地主と、収奪され身ぐるみはがれるようにしてやせ細つてゆく農民の姿がうかがわれる。

(研究誌「太宰治」第三号より)

弥生人タイプの自作農としての誇りを収奪される時、農民は、みずからの稲作農耕民としての主体を喪失して、貧民化し、自我は水田から離別して、もともとの採取・狩猟・漁撈を主軸とする縄文人タイプの浮遊者へと帰還する。

稲作農耕に従事してはいても、すでに、それは、農奴の強制労働にひとしいのだ。

そのとき、はじめて、津軽の民は、哀切の姿を、この地の紀元前の風景へと返済する。

たけの生れ育つた環境は、そのような、脱落弥生人系のそれであり、騎馬人タイプの津島家とは鋭く反極に位置するものだった。

そして、それこそが、同じ反騎馬人タイプの自我を潜在意識に蓄電しつつあつた修治との同調現象を生みだす、最も

大きな要因の一つとなった。

こうして、たけが修治の意識の曙へと密輸したのは、騎馬人タイプの権力者達の目を盗んで、ひたすら零細民の生活のひだめに秘守してきた、遠く縄文時代にまでもその淵源を辿ることができる「津軽の心」そのものであった。

それは、ある意味では、たけの実家から弥生人タイプの農民のアイデンティティを奪取した津島家への丁重な返礼であり、謝辞ではあったが、しかし、この悲運は、けっして、近村ただけを襲っていたのではなかった。

本来、熱帯植物である稲を本州の北限、津軽で栽培するということは、どだい無理な話である。暖衣飽食の現在
 修 ほとても想像することができないが、本州の北端寒冷の地津軽では、実に約三百三十年の間に、約六十回の凶作が

あつた。昔は餓死する者数知れず、ついには人肉をさえ食ったということである。岩木山や十三湖、龍飛などの美しい自然が一度牙をむくと、そのような悲惨な生き地獄が出現するのである。

原 子

(研究誌「太宰治」第三号より)

この、田口昭典氏の一文をまつまでもなく、どんぐりを拾い鮭をすなどり鹿を射とめヒエを管理栽培することによって大自然の提供する多彩なメニューを敬虔にうけとめ得た縄文人タイプのライフスタイルをかなぐり捨てた津軽の民が、稲作中心の弥生人タイプへと転身した結果の、無惨なつけは、二〇〇〇年以上をけみし、なお、修治の時代につながっていたのだった。

後年、修治は、小説「津軽」の中で、「大阪夏の陣、豊臣氏滅亡の元和元年より現在まで約三百三十年の間に、約六十回の凶作があつたのである。まず五年に一度ずつ凶作に見舞われているという勘定になるのである。」と書いた後で、さ

らに、N君のみせてくれた資料から、つぎの部分を紹介している。

翌天保四年に到りては、立春吉祥の其日より東風頻に吹荒み、三月上巳の節句に到れども積雪消えず農家にて雪舟用ゐたり。五月に到り苗の成長僅かに一束なれども時節の階級避くべからざるが故に竟に其儘植付けに着手したり。然れども連日の東風弥々吹き幕り、六月土用に入りても密雲幕々として天候朦々晴天白日を見る事殆ど稀なり（中略）毎日朝夕の冷氣強く六月土用中に綿入を着用せり、夜は殊に冷にして七月倭武多の頃に到りても道路にては蚊の声を聞かず、家屋の内に於ては聊か之を聞く事あれども蚊帳を用うるを要せず蟬声の如きも甚だ稀なり、七月六日頃より暑氣出で盆前単衣物を着用す、同十三日頃より早稲大いに出穂ありし為人氣頗る宜しく盆踊りも頗る賑かなりしが、同十五日、十六日の日光白色を帯び恰も夜中の鏡に似たり、同十七日夜半、踊兒も散り、来往の者も稀疎にして追々暁方に及べる時、凶らざりき厚霜を降らし出穂の首傾きたり、往来老若之を見る者涕泣充滿たり。

偏西風の蛇行に伴う氣候不順は、とりわけ、東北地方を常襲したが、それに伴う凶作について、小説「津軽」は、「私たちの幼い頃にも老人たちからケガズ（津軽では、凶作の事をケガズと言う。飢渴の訛りかも知れない）の酸鼻戦慄の状を聞き、幼いながらも暗澹たる気持ちになって泣きべそをかいてしまったものだが」としてした。

そして、その、「酸鼻戦慄」におののく津軽の民は、明治五年四月の弘前藩士杉山竜江の目に、つぎのように映じたのだった。

夫れ、津軽一郡の地山野広漠、人民頑愚、旧染の幣風最も去り難し。就中昔時国陋の幣政、その城域を鎖して人

民の耳目を壅蔽し、士たる者は唯其家禄を貧るを知り、農たる者は唯其の田租を輸するを知るのみ、むしろ愚なるを勧めて其の賢なるを誘はず。要するに覇政の余弊の然らしむる処、最も今日開花の障害を遺せり。

津軽の弥生人タイプ化がはじまってすでに二〇〇〇年をけみしようとしていて、なお、それ以前の一〇〇〇〇年近く続いた縄文人タイプの自然状態を重んずるライフスタイルに帰還しようとして棧をうかがっている津軽の民は、棧を見るに敏かつ相手のどんな隙にもすかさずつけ入って息の根をとめる騎馬人タイプの人々にとっては、恰好の餌食だった。

そして、もともとは、縄文人系の血の色濃かったはずの金木村惣助が、生きぬくための当然の方便として、弥生人タイプの稲作農耕に全身全霊をうちこみ、金木新田開発後の波乱の月日を、ありとある智略によって乗り越えたとしても、彼を非難するにはあたらないし、さらに、彼の子孫が、「津軽承継公伝」にあるような、「我等の数多くの田園を占めたるは、白地にその実を言ふときは祖先開墾の力に頼るにあらず、また大金を投じて購求したるにあらず、多くは往年凶荒に際し、僅少の金銭を貸与し小民輩之を償ふ能はざるより所有に帰したるものなり」という手法をフルに駆使して、大地主という、いちじるしく脱弥生人系の収奪階級へと転身していったとしても、それを誹謗する権利は何人にもあるまい。

実存の陥穽にまっさかさまに転落した人間の生の態様は、彼の生活エネルギーと陥穽の構造との相関係数によって決定される。

餓死するか、生き残るか。

より恒常的に生き残る道を選んだ金木惣助の子孫が、やがて、修治の曾祖父惣助に至って、帰農士族の放棄した農地をすばやく低価格で買い占め、さらに、うちつづく凶作期にいためつけられた弱小小作農に高利の金を貸しつけ、返済

不能とみるや、すかさず小作人へと吸収することによって、収奪棧構をますます強化し、ついには、父源右衛門の代になって県内長者番付第四位の地位を獲得したとしても、それを、常軌を逸した病理行動と診断するのは至難の技であろう。

かててくわえて、「惣助は粗食に甘んじ、早寝早起を實行し、勤勉努力を旨としていた。時代の動きを洞察する慧眼と、それに加えて誠者な人柄とたゆみなき実行力とが山源の経済的な地盤を強固にしたものと思う」と「太宰治の出生と「家」」（『國文学』六三年四月号）の中で小野正文氏が書いている状況を斟酌すれば、生活基盤整備の遅れという当時の日本の構造欠陥の責めを、ひとり津島家に課する論理は、成立しがたい。

しかし、二〇〇〇年以上もの昔に、かなり高度な知恵の文化を熟成させ、詩的共同体としての高密度な文化圏域を誇っていたはずの、縄文系の津軽が、高潮のように寄せてくる弥生系の稲作農耕文化によって、じよじよに、しかし、確実に、縄文文化の中枢にはぐくまれた詩的共同体という母源を侵食され、剝奪されていった、という、歴史的な経緯のはてに、もつともローカルな収奪棧構としての津島家を位置させたとき、すでに警察権力や行政権力と巧みに密通して脱弥生系を果たし、かなりの騎馬人系の支配階層となった津島家は、二重の意味で、母源喪失の状態にあった、という、歴史的、社会的事実を否むわけにはいかない。

つまり、津軽地方そのものの、域圏全体としての母源喪失状況と、その中であつて、さらに富裕階層へと転身を果たした津島家の、ファミリー規模での母源喪失。

そして、そこで出生した修治が、生母たねからの切断、最初の乳母からの切断によって手ひどく蒙ったはずの、二重のプライベートな母源喪失を、津島家、津軽地方のファミリー的、域圏的な母源喪失と、ぴったり重ね合わせたとき、すでに、彼は、逃れ難い母源喪失シンドロームに、がんじがらめに召し捕られてしまったのだったが、その「重ね合わ

せ」の役を果たしたのが、ほかならぬ、育ての乳母^{アゲ}たけなのであった。

3 没落縄文人のいざない——津軽の民だけ——

たしかに、津軽地方は、ここ二千数百年来、あらがい難い「弥生人」化、「騎馬人」化の波にさらされてきた。

しかし、津軽の全域が、そして津軽の民の全員が、すべて、完全に脱「縄文人」化した、と断定することも、また、不可能である。

修 文化人類学者山口昌男の「中心と周縁」思想について述べた小阪修平の、「現代思想のキーワード」(「別冊宝石」⑱)中の、つぎの一文をみよ。

原 子

ちやうど神話が挑発するもの(トリックスター)を不可欠の構成要素としているように、文化を体系として考えた場合、文化の中心は中心だけで成立しているのではなく、周縁によって活性化されることによって成立している。中心は周縁を排除すると共に、周縁によって生気づけられる。このような中心と周縁のダイナミックな弁証法が、山口が「知的冒険者(?)と自称しながら、文化的イデオログとして情況に喧伝されていく時の視点だった。

中心と周縁というコードは、ほぼ、秩序と混沌、制度化されたものと制度化されざるものの対立を意味している。たとえば山口が周縁として数えあげるものは、風土記における「まつろわぬ神」であり、宗教におけるタブー的なものであり、意識に対する無意識であり、こうして周縁はあらゆる文化・社会現象の解説のために拡大される。

この場合の「中心」を、「津軽地方」との対比における、「政府所在圏」または「青森市や五所ヶ原市という人口集中都市圏」ととらえることもできようが、さらに、津軽内部の金木圏の昔ながらの自然状態をかなりの程度維持している地域との対比における金木の比較的人口の集中した地域ととらえることもできようし、さらには、フランスのB・マンデルブローの「フラクタル理論」に従って、その構図を縮少していけば、ついには、近村だけの生家と津島家の関係にまでも延長できる。

津軽地方が、トータルとしてどんなに脱縄文化したとはいっても、必らず、昔ながらの自然状態を相当程度保全している地域・ファミリー・人は存在しているのであり、これは、金木圏でも同様であろう。

津軽地方が、どんなに、総枠として脱縄文化の路線をひたはしつたとしても、知られざる周縁部に、ひっそりと、「秩序」よりは「混沌」、「制度化されたもの」よりは「制度化されざるもの」にかたくなに偏執するマイノリティが、したたかに、かつ、困窮状態で生きのび、この地の基層を形成しているはずの縄文人タイプの遺風をいまに伝えているとしても、驚くにもあたるまい。

そして、そのシンボルを、わたしたちは、まず、津軽のイタコやカミサマの世界にみることができる。

青森県下では、早春に神職やイタコなどを招いて屋敷を祓ったり、その年の吉兆禍福を占ってもらう「春祈祷」の風習がさかんであった。現在でもこれは広い需要をもっており、イタコが消滅しつつある今日では、近隣や親戚の数軒が組になり、中心となる家や地区の集会所などに婦人たちが集まり、カミサマの出張を求めて「春祈祷」を依頼するのである。カミサマは各家の神棚や屋敷の門口などで祓いをしたのち、さまざまな神や各家の先祖・ホトケなどをおろして、一年の託宣を告げる。たとえば、「〇月中、〇歳の男は病いに気をつけよ」「〇月は子供のケガ

に、〇月〇日は火に用心せよ」といった注意事項が示され、婦人たちはメモをとったりして、一年の生活の指針とするのである。

(「津軽のカミサマ」より)

この、池上良正氏の一文は、津軽世界におけるシャーマニズムの根づよい潜在化を指摘してあまりあるが、みずからを忘我の恍惚状態へと誇導することによって、トランス状況の陥穽の底深く沈みこみ、おのれの深層意識の最深部に不気味にうごめいている、コミュニティ構成者によって集団仮構されたはずの超自然的な人格と対面し、感応し、融合する、津軽のイタコやカミサマの淵源を確定することは、非常にむずかしい。

しかし、弥生タイプの農耕民族化による津軽世界の貧富の拡大や階層化、さらには津軽藩を頂点とする騎馬人タイプの武装権力による収奪や支配が、「秩序」や「制度」「管理」、そして「文化の一元化」による「中心」化傾向をとればとるほど、それからはみだしていく、まつろわぬ津軽の民たちの、おそらくは一万年近くの伝統にうらづけられた縄文人タイプの母源世界へのあこがれは、「周縁」化傾向の中で根づよく生き残ったのではないか。

そして、その、もつとも今日的な遺習としての、津軽世界になお根づよく生活化されている民間信仰の種々相ではないのか。

視覚にハンディキャップをもつ女性が、初潮前に指導者のもとに身を寄せて巫女教育をうけ、神をつける秘儀をふくむ「ユルシ」の儀式で独立し、祈祷、卜占、ホトケオロシとよばれる「口寄せ」などをおこなうイタコは、あるいは、母系制を中心とした津軽の縄文世界の、地母神の系譜をひく、ポモナ系文化の、もつとも今日的な実在ではないのか。

また、身体上のハンディキャップの有無に拘わらない女性やときに男性が、衝撃的な体験をきっかけとして信仰の世

界にはいり、超自然的な人格と直接的に接触や交流をすることによって、霊能者となり、自他の救済行動をとるカミサマも、また、イタコと同じ津軽の巫者系文化をになう、母源回帰の人々ではないのか。

そして、霊能を男女一对の木像に入れこめたオシラ様信仰のもつ家族共同体的な異界交信や、男女一对のワラ人形に超自然的な人格を入れこめて凶事排除のまじないをおこなうヤマイボイ・人形送り・ホノカミ送り・虫送りなどの呪術行動など、さらには地藏信仰や、子らを水難から守る水虎信仰スイコ、さらには庚申講、二十三夜講、百万遍などの講的行事をふくめ、津軽世界の基層を脉々たる水量でうるほしている、これらの、異界との交信・接触・交流現象は、まさしく、弥生人化や騎馬人化の波をかぶりつつも、したたかに生きながらえてきた、津軽世界の縄文系のアニマティズム・アニミズム・シャーマニズム複合文化の、もつとも今日的な継承ではないのか。

そして、それを暗示するかのような、カムリカムリの遺習。

カムリはわら縄でつくった被りもので、旧暦の八月一日のヤマカケとよばれる岩木山への集団登拝のときに使用した。このときの服装は白装束でなければいけないとされ、頭につける鉢巻も、神の御前に出る清浄潔白な姿を示すものである。西津軽郡鯉ヶ沢町細ヶ平、芦范などの村では、大正時代のはじめころまで鉢巻の代わりにカムリカムリを被る若者がいた。

〔青森県立郷土館・総合案内書〕より〕

この「カムリ」を、同じ縄文系文化を今なお生活の中に全面的に保全しているアイヌ民族の「サパウんペ」(礼冠)と重ねあわせてみよ。

もちろん、「サパウソベ」は、木皮で編んだ輪を基本とはするが、神事を中心とした儀礼用冠であることや、前額にクマや鳥の彫刻をつける点など、津軽の「カンムリ」が岩木山の鳥居を前額につけているものなどとの、縄文系としての一致点はみのがしがたい。

そして、さらに、「イタコ」の語源説の一つとしてのアイヌ語起源説に注目せよ。

もともと、津軽と北海道を包摂する、かなり共通性に富んだ縄文文化圏が存在したという事実は、たとえば、東北に数多く現存するアイヌ語地名によって、すでに、証明されている。

だが、アイヌ民族文化が、北海道の縄文文化、続縄文文化、そして擦文文化の連続線上に位置するという事実を、言語史に照応させるとき、至極当然の判断としてうかび上がってくるのが、縄文系文化をもっていた人々の言語とアイヌ語の連続性であろう。

子 まして、アイヌ民族文化の成立が、ここ八〇〇年ほどの間という大方の定説をもとにするならば、すでに、津川の蝦夷六人に冠位を授けた、と斉明天皇元（六五五）年の「日本書紀」の記述にみえる「津川の蝦夷」は、けっして、アイヌ民族ではなく、七世紀当時の北海道の続縄文期の縄文系の人々とほとんど同系の人々とみることができるといえる。

もし、「イタコ」の語源が、現在のアイヌ語の「itako（しゃべる）」にある、とすれば、そして、一二、三世紀頃の成立といわれるアイヌ文化の中のアイヌ語が、それ以前の縄文系の人々の言語の連続線上にあるとすれば、まさしく、「イタコ」は、アイヌ語成立以前の北海道の縄文系の人々と、津軽の縄文系の人々との間に共通にもちいられていた「縄文系の言語」の、今日的に変化をとげたものの一つ、ということになる。

そして、おそらくは、「津川の蝦夷」つまり、津軽地方に、今から一三〇〇〇年も前から、営々として「神威を重んじ、親自然的で、家族的結合を重視し、美意識優位の、詩的共同体的な特質」にいろいろられた縄文系の母源世界を醸成して

きた人々の不遇なる末裔こそが、津島家という「中心」の対極に位置する、近村たけの生家であり、また、その「周縁」性ではなかったのか。

であればこそ、たけの、修治への、縄文世界への限りない誘導ではなかったのか。

小泊にいる子守のたけさんはじめ、ぼくの会った太宰の幼少年期を知っている人々は、太宰治は地藏盆ごとに女中や使用人やたけさんなどといっしょに川倉に行ったという。

〔太宰治文学の基層〕国文学・解釈と鑑賞・一九七四・一二月号より〕

奥野健男氏のこの一文が暗示するものは、あきらかに、川倉地藏盆にくりひろげられる、津軽の、超自然的な人格との遭遇をつうじておのれの根源へとさかのぼろうとする母源回帰運動へと、たけ達が、修治をいざなったという、ゆるぎない事実性である。

太宰が三歳になった年の四月、同村の近村タケ（当時一四歳、現在越野姓）が叔母の専任女中として住み込むことになった。タケの姉トセは以前叔母の次女ふみの子守をしたことがあり、その後津島家の炊事婦として再度雇われていたのを実家の都合で暇をもらうことになったので、その代りにタケが雇われることになったのである。小作米を納める代りとして住み込みの女中や子守をつとめることは、「五木の子守唄」の場合と同様であった。近村家もともと零細自作農であったが、相次ぐ冷害のためにわずかばかりの借金を返済できず、ついに津島家の小作人に転落したのである。

〔評伝 太宰治第一部〕より〕

この、相馬正一氏の一文は、たけの実家が、ついに「弥生人」系の稲作農耕民への転身を果たし得ず、被収奪階層としての「没落縄文人」タイプの小作人へと転落していく経過を明快に物語っているが、それ故にこそ、逆に、津軽を深部で支える縄文系の母源世界へと、たけがひきずりこまれていったのは、当然の帰結であったし、また、それを背にいはい負った一四歳のたけが、からみあう思いの糸くずを抱いたまま、ほとんど本能的に、無抵抗な修治を伴って、むしろ、おのれの母源たる縄文系世界へと帰還したとしても、それを難ずる資格は、だれにもない。

修
こうして、無辜なる幼年の修治は、たけの先導によって、後戻り不可能なポモノコンプレックスの深奥へと、まっさかさまに転落していったのだった。

（本論文は、平成三年度札幌大学研究助成による研究成果の一部である）